

第2期食と農業農村振興計画骨子に対する 地区部会等からのご意見・ご提言

- 1 長野県食と農業農村審議会委員と地区部会委員等との意見交換会要旨
- 2 地区部会からの意見・提言
- 3 市町村長等からのご意見・ご提言
- 4 農業団体等からのご意見・ご提言

1 長野県食と農業農村振興審議会委員と地区部会委員等との意見交換会 要旨

会場・項目	I 夢に挑戦する農業			II 皆が暮らしたい農村		
	(1) 夢ある農業を实践する経営体の育成	(2) 自信と誇りを持てる信州農畜産物の生産	(3) 信州ブランドの確立とマーケットの創出	(1) 農村コミュニティの維持・構築	(2) 地産地消と食に対する理解・活動の促進	(3) 美しい農村の維持・活用
佐久会場 (7月9日)	<p>○急速な高齢化が課題</p> <p>○収支が高い地域は後継者がおり、定年後に就農し継承もしている。畜産・きのこ農家は高齢化が進み厳しい状況。部門により差がある。また、後継者の嫁の問題もある</p> <p>○企業経営により従業員を増やすと経費負担が生じ、どうなのかとの意見もある</p> <p>○大規模農業は一つの政策で異論はない。一方、小規模農業や兼業農家など農村を守っている経営をどうするか。地域単位の取り組み必要</p> <p>○技術力、経営力は農家によって違うが、両方を兼ね備えないと農家として生きていけない</p>	<p>○高原野菜地域(南佐久)は、農地が足りない状況で、農地の確保が必要</p> <p>○地域で特徴のある産物をいかに活かしていくのかが重要で、環境や気象も大いに利用する必要。一方、温暖化の影響が心配される</p> <p>○生産と販売の両立があって農業は成り立つもので、現在、生産が過剰な状況が続いている。面積増より、コンパクトな高付加価値のものを増やしたらどうか</p> <p>○農業にはマニュアルがなく、経験と情報と技術が必要だが、技術があがってきた経過として指導者がいた。6次産業化も含め、JAや行政の指導者が必要</p>		<p>○過去に立ち上げた、味の研究会も高齢化しており課題</p> <p>○直売所のファンが多い。出している高齢農家の小さな働きも大事ではないか</p> <p>○農業・農村体験は必要である</p> <p>○儲からなくてもストレスなくやっている農業もある。生涯現役農業。兼業農家だから良い面があり、これが農村を守っている</p> <p>○集落営農を皆で検討する必要があり、営農のための農機具は十分にある。集落で有効利用しつつ、水路管理等地域を守ることが必要</p>	<p>○地産地消では冬場対策が必要</p> <p>○直売所の販売は農家所得に貢献しているが、安全性も確保することが必要</p> <p>○冬場の野菜がない。かぼちゃを冷凍して冬場に出すなどしたが、直売所だけでなく加工などの他の方法も考える必要</p> <p>○冬場の野菜供給について、冬場に出せる、にんじん、たまねぎ、じゃがいもなどは保存・加工などして、冬場に出せるようにしたらどうか</p>	
伊那会場 (7月30日)	<p>○農業を夢あるものにするためには、儲かる農業を实践することが必要で、そのためには、経営感覚をもった農業者を育成すること</p> <p>○高齢化が進み世代交代が必要。認定農業者、集落営農組織、農業生産法人が重要な担い手と位置付け</p> <p>○農地集積への取組は、担い手対策への裏付けとしても非常に重要な部分であり検討が必要</p> <p>○新規就農者対策として、子弟農業者の視点も重要で、決して落とすことのないようにお願いしたい</p> <p>○Iターンについて、都会の人たちは山間地や農村への期待・希望があるが、その方たちをどうやって定着させるかが課題</p>	<p>○作れば売れる時代から、自分たちで考えなければ売れない時代へ移り変わってきている</p> <p>○農業水利施設や共同利用施設の老朽化への対応が必要</p> <p>○山間地の遊休農地で栽培されるそば、大豆の採算が合うよう対策が必要</p> <p>○耕作放棄地は、集落営農型の法人で効率的に解消でき、個人の農業者では困難。小規模で基盤が未整備の条件不利地への対応が必要</p> <p>○肥料高騰について、資源を大事にすることを計画の中で検討できないか。耕畜連携の更なる拡大が必要</p>	<p>○ブランド化が重要で、観光等の他産業との連携が必要。また、農村女性の役割発揮も必要</p> <p>○農業経営・農村地域の活性化に結びつく6次産業化という方向付けが必要</p> <p>○直売所を始め、流通の多様化への対応が必要</p> <p>○山間地ほど農産物のブランド化の動きがあり、活性化に有効</p> <p>○地域の農業が良くなる6次産業化の推進のため、県として啓発を行うべき</p> <p>○農産加工グループの人・技術・施設を整える必要。男性も営業等に参加するシステム必要</p>	<p>○コミュニティは、集落営農組織で育ててきたが、営農サイドだけでなく、集落全体の機能という視点で農地・水など、個人ではなく集落で取り組むことが重要</p> <p>○JA等の生産組織もこの計画の中に盛り込み取り組むことも必要</p> <p>○「皆が暮らしたい農村」というところを是非推進してほしい</p> <p>○これからの農業は、環境の視点や周りの人の理解なくして続けていけない。農業者以外の方とのコミュニティについても、指標や目標を定めて取り組んでもらいたい</p>	<p>○子供たちに対する食育に一層力を入れることが必要</p> <p>○有害鳥獣対策については、補助金だけでなく多様な対策を検討する必要</p> <p>○有害鳥獣や耕作放棄地の発生等の課題があるが、シルバー人材センターとの連携も計画の中で検討していただきたい</p>	

会場・項目	I 夢に挑戦する農業			II 皆が暮らしたい農村		
	(1) 夢ある農業を実践する経営体の育成	(2) 自信と誇りを持てる信州農畜産物の生産	(3) 信州ブランドの確立とマーケットの創出	(1) 農村コミュニティの維持・構築	(2) 地産地消と食に対する理解・活動の促進	(3) 美しい農村の維持・活用
長野会場 (7月31日)	<p>○担い手育成は手厚い支援が必要で、人材育成について重点プロジェクトとして取り組むべき</p> <p>○他産業のない地域で、国の方針による農地集積を行うと生きがい・やりがいを失うなど、地域の存亡に関わってくる。定年後に農業で食べる兼業農家の育成も必要</p> <p>○他産業からの農業参入、農業の6次化などによって、地域発展への視点を持って農業を成長産業としていくことは重要</p> <p>○高齢化しているにもかかわらず、生産を上げろというのは酷な話</p> <p>○果樹王国である本県農業を守っていくには担い手、企業的経営体の育成が必要</p>	<p>○これからの5年間は、農業農村は大きな変貌の時期であり、特に果樹栽培農家は長野地域において半減するのではと危惧されるので、踏み込んで策定願いたい</p> <p>○農畜産物の安全性、情報開示、消費者理解を進める取組が必要</p> <p>○農家の可処分所得が増えていないことから、儲かる農業のビジョンを具体的に示して欲しい</p>	<p>○農産物のブランド化・確立については、新たな要素として、例えば、観光、生産プロセス、生産環境なども付加価値として取り込む観点で検討すべき</p> <p>○マーケティングは対象(ターゲット)を明確にして、組織としてのマーケティング、個人としてのマーケティングの視点が必要</p> <p>○6次産業化がポイントとなる</p> <p>○マスメディア、マスコミを使ったPRが重要。知的財産の活用についても検討必要</p>	<p>○遊休農地の増、限界集落の拡大といったピンチは、新たな仕組みづくりのチャンスとして捉えたい</p> <p>○農村とは何ぞやということをしっかり議論する必要がある。もはや皆が同じことをする時代ではない</p>	<p>○学校校給食における地産地消は、真剣さの・取組の度合いに差を感じる。命の尊さ、食の大切さを教育面からしっかりアプローチする必要</p> <p>○教育現場における農の知識向上が必要、教師が農作業の基本を知らなすぎる</p> <p>○行事食・伝統食など、親から子へ受け継がれる食文化の継承が失われつつある。おやき、笹寿司などは防腐効果もあるなど食に関する知識・知恵を伝えていくことも必要。</p> <p>○「もったいない」の精神が活かされるような取組を考えてもらいたい</p>	<p>○地域エネルギーについて、産業としての発展性と地域振興、両面の効果を期待</p>
松本会場 (8月2日)	<p>○新規参入だけでなく、後継者に対する支援策も必要。専業だけでなく第二種兼業など中小の農業者も含めて支援を行うことが必要</p> <p>○定年後の人が主体となった集落営農や、農地を支えている80歳まで頑張っている高齢者などそれぞれ分野を支援する体制が必要</p> <p>○集落営農は生産をあげる法人組織としてと、地域を守る組織としての二面性があり位置付け、方向付けを示したらどうか また、集落農業の高齢化対策も必要</p>	<p>○食と消費者を中心に評価。食の生産が農業の原点。消費者の側に立って農業振興を考えることが必要</p> <p>○病気に強い品種の開発や農薬の削減、大型化、流通コストの削減等による徹底したコストダウン。もう一つは、ここでしか作れないもの、中山間地で有機などの特徴的なものを作ることも必要</p> <p>○設備が老朽化した農業用水路の更新をプランに入れていく必要</p> <p>○地球温暖化への対応が必要</p> <p>○遊休農地で企業が農業生産を行うような逆6次化の誘致もどうか</p>	<p>○販売面や収穫時期を含めて県独自オリジナル品種の育成・宣伝が必要</p> <p>○農業県として、社会的共通資本としての「農の営み」を計画の中でアピールすべき</p> <p>○都市との交流、観光と結びつけて、特に中山間地域の生きがいという点も含めて力を入れていきたい。都市住民の農村での消費額なども計画で示したらどうか</p> <p>○消費者も農村に家を建てて生活している。農村コミュニティではなく、地域コミュニティとして農業をどう守るかという方向で考えるべき</p>	<p>○高齢化しており、手近に直売所など買いに行ける所があることが、信州ブランドを地元の人理解することにつながる。地域内に住む都市型消費者との連携が必要</p> <p>○中山間地域など条件の悪いところへは注意を払い、対策を講じなければ農業だけでなく住環境が悪化し人が住めなくなり農村が衰退する。非農家を含めた地域全体で中山間地域を守る施策が必要。その地域の農業のあり方として、量が少なくてもその地域でしか作れない物を作っていくことが必要</p> <p>○素晴らしい農村風景を観光と結びつける必要</p>	<p>○消費者のブランド物志向と安い輸入物志向の二分化の中で育つ子供たちの将来が心配。人間が人間らしく生きていくためには食は公平でなければならぬので、格差を生まないような生産方式を見いだしていく必要</p> <p>○地場消費の場合にはあまりもつけがでない。何とかして、そのなかで儲けが出るような流通販売対策が必要</p> <p>○食育も計画に具体的に書かれているが、引き続き、食育リーダーや食育コーディネーターの育成が必要で、郷土料理や伝統食の調理体験、学校給食も教育という観点から地元食材の利用を増やすということが必要</p>	<p>○展望を打ち出していく上では、日本一きれいな農村風景をつくるつもりで中山間地域対策、後継者対策、鳥獣害対策を進めたらどうか</p>

2 地区部会からの意見・提言

NO	項目	部会名	意見・提言
基本方向 1 夢に挑戦する農業			
(1) 夢ある農業を実践する経営体の育成			
1	佐久		後継者のいない高齢農家がほとんどなので、10年先をみると心配される
2	佐久		地域の担い手として、有力な農業法人がもっと育てばいいと思う
3	佐久		企業的経営では、所得は上がらないのではないかと。家族経営の方が安定している。企業経営はロスが多い。
4	佐久		担い手不足と言われるが、本当に不足しているのか。誰が困っているのか。作物によっても違うのかもしれないが、野菜関係は後継者がいるのではないかと
5	佐久		長野県農業のため、何人の担い手が必要なのか。
6	佐久		新規参入だけに頼るより、既存農業者が法人化し、彼らを雇用して地域を支えていくことがよいのではないかと
7	佐久		後継者を確保するには、儲かる農業をすること。儲かれば後継者は残る
8	佐久		儲かっても違う職業を選ぶ後継者もいる。
9	上小		先行投資が必要な若者への支援が不十分。就農間もない若者の将来の可能性への支援もあっていい。情報や夢、絵に描いた餅では食べていけない。行政は、実績はなくても個々の声に耳を傾けてほしい。
10	上小		青年就農給付金について、定着するかどうか分からない新規就農者が対象となっているが、すでに定着している農業後継者や担い手を支援すべきである。就農して数年が経過し、経営方針が決まっている段階の人たちこそ支援すべきだ。
11	上小		夢を実現する手法として、先行投資により必要な装備をそろえ、お金は後から返済していく形が重要。
12	上小		中小農家が離農し大規模経営が農業を支える時代に向かっており、百人全部は無理だが、十人なら達成できる可能性はある。1～2割の大規模経営体が農業を支え、地域でそれを支援する方法を考えてほしい。
13	上小		農家と農政の間にギャップがある。1～2年で制度を変えるのではなく、5年、10年の継続的な支援と、その効果を追跡できる体制が必要。
14	諏訪		農業を夢あるものとするためには、儲かる農業の実践が必要
15	諏訪		経営感覚を備えた担い手の育成が必要
16	上伊那		いいリーダーがいる所には、まとまりのあるいい集落ができる。いいリーダーの育成が必要である。
17	上伊那		若い担い手として新規就農者を確保することも必要であるが、団塊の世代の定年帰農者を担い手として活用することにもっと力をいれないと、今後農業・集落が維持できない。

18	下伊那	農業の担い手の減少が問題となっているが、なぜ減少したのかの分析が行なわれてこなかったのではないかと。そこを何とかすれば、遊休農地の解消や生産額の拡大も図られるのではないかと。
19	下伊那	現在、少なくなった担い手を他から補うためにI・Uターン者に対する施策が行なわれているが、これらと同じように農家子弟に対する施策を重点的に取り組むべきである。農家子弟は地域で生まれ育った人であり農村コミュニティの維持にも有効である。この視点が施策から抜けているように思う。
20	松本	農村の活性化や直売所の運営、農産物加工などにおいて女性農業者の役割が大きいので、さらにその活動への支援を明記する必要があるのではないかと。
21	松本	土地利用型作物については、現在、人・農地プラン策定を進める中で問題は少ないのではないかと。園芸地帯における担い手対策、販売対策、目標設定が必要と考える。
22	松本	中小、兼業農家を含む農家子弟への支援策を望む。
23	松本	農家子弟への支援策について、特出しすると支援策があることがわかりやすいのではないかと。
24	松本	地域の担い手が必要としている機械整備等については、集団だけではなく個人に対しての補助施策の充実が必要である。
25	松本	新規就農者の育成にあたっては、地域がサポートしていける態勢の構築支援が必要である。
26	北安曇	人・農地プランの事項は、入っているのか
27	北安曇	兼業、自給的農家が多い地帯では、農業後継者確保のためには経済的要素を踏まえる必要がある。(農業だけでは成り立たない場合もある)
28	北安曇	元気な高齢者をいかに動かしていくかという多様な担い手確保育成が今後の要検討事項であり、地域農業の発展にもかかわる
29	北安曇	集落営農、法人とも収益を確保するためには、営業活動も含め外へ売り込む姿勢が必要となる
30	長野	若手の農業者は少数で、ほとんどは「農兼合体の農業」で経営を支えているので、その辺に焦点を絞って、今後どのような方向に移行させていくか、前向きな計画を立てて欲しい。
31	長野	経営に雇用をいれても一人前になるので5年くらいかかる。こういうところにも援助するようなことをこの計画の中に盛り込んだ方がいいのではないかと。労働力や雇用問題も取り上げていかないと農地を維持できない。
32	長野	人材がいないのであれば、どこからか連れてくるしかないということで、そういう観点も欲しい。農産物を作るだけでなく、地域活性化のための人材を探し、育成していくような取組もお願いしたい。
33	長野	兼業農家がやりやすい仕組みも計画にあってもいいのではないかと。
34	長野	兼業農家、大型農家のそれぞれをどう支援していくのか計画に欲しい。
35	北信	きのこは安くなるし、アスパラは駄目になり、どうしたら良いもんか、今は、現状維持が精一杯。
36	北信	後継者を確保するには、儲かることにつける。
(2) 自信と誇りを持てる信州農畜産物の生産		
37	上小	放射性物質の安全性について、消費者から個々の農産物毎に質問され対応に苦慮している。県としてポスターなどで「安全宣言」のようなことを検討できないか。

38	上小	農業振興上、行政やJAのプロの指導がカギと考える。近年、担当者の異動が激しく、人間関係が希薄になり、ほしい情報が手に入らない。行政・JAの指導者が継続的なつながりを持つことで、新技術等の必要な情報が農家に届くのではないかな。
39	諏訪	冷涼な気候、多日照などを活かし、高品質と安全性を備えた農産物生産を進める
40	上伊那	県では、りんご3兄弟を重点的に推進をしているが、苗木を作るのに5年くらいかかると聞いている。面積拡大のために計画的な苗木の供給が必要である。
41	上伊那	稲のホールクロップサイレイジなど、耕畜連携対策は大変いい事業であるので、施策の継続をお願いしたい。
42	木曾	新たな品目導入に当たってもマーケティングの視点が極めて重要であり、消費者ニーズや売り方などを十分検討されたい。
43	松本	低コスト化の推進は重要である。具体的には、コンテナ流通、農薬使用量の削減等を推進していく必要がある。
44	松本	低コスト化に関しては、すいか等における等級の簡素化やコンテナ流通については依然から取組んでいるものもあるが、それ以上に環境の変化が激しい状況にある。
45	松本	「環境にやさしい農業」ということばが漠然としてわからない。生産者側と消費者側でことばから受ける意味合いが異なってしまうのではないかな。
46	松本	遊休農地対策については、引き続き進めるべきである。
47	北安曇	他県産のりんごでは、通年冷蔵による流通があるが、本県産では、貯蔵技術、施設がない。戦略、産地づくりについて考えていく必要がある
48	長野	かんがい施設などが老朽化して更新等の前に壊れてしまい、補助金が出ないことがある。計画的に見直して、補助金もある程度出してくれるようなことをやっていただきたい。
49	長野	現状のまま推移すると今後5年間で、特に果樹産地は生産量が半分になると思われる。そういう中でどういう対策をして維持、または向上させるか、そういうことがあまり見えてこない。踏み込んだ内容が欲しい。
50	長野	骨子の内容は素晴らしいと思う。しかしながら、生産量はどんどん落ちている。農業は儲からないから農業離れが進んだ。2年後、3年後のこうなります、こういうふうになります、という具体的な施策が欲しい。
(3) 信州ブランドの確立とマーケットの創出		
51	佐久	農業は自分で作った物の価格を自分で決められない。
52	佐久	消費税アップしたら、農産物は、生産者にコスト吸収の転嫁がされると思われる。
53	諏訪	ブランド化のためには安定生産やロットの確保が必要
54	諏訪	観光など他産業との連携を進めることが必要
55	諏訪	契約的取引により経営の安定化を図る
56	木曾	生産についての対策は従来から充実しているが、農業振興を図る上で今後は販売対策を充実されたい。
57	松本	農業振興の上で、ブランド化による高付加価値化は重要である。
58	松本	PR活動が重要

59	北安曇	6次産業化のためには、生産法人等の生産側のみならず、仲介業者、流通・販売業者とのマッチングによる体制の確立が必要
60	長野	農家が減っている中で、せめて農産物が無駄にならないように消費者に届けばいいと思う。また規格外品が加工など何とか有効活用できればいいと思う。
61	長野	農業、林業、商業、工業、観光と連携して推進して欲しい。
62	北信	農産物は、手間が掛かるので、それに見合った価格になってほしい。
63	北信	六次産業については、机上の論理では、素晴らしいが、通常の場合、加工品を作るために商品を作っているわけではないので、B級品やC級品を加工に回すような考え方だと、加工に回す量が足りなくなってしまい、良い製品まで加工に回ることになり、本末転倒になってしましまうので、慎重に進めるべき。
64	北信	長野県は、漬物の製造について、条例による許可制度になっているが、山形県などは条例はない。今の農業情勢で新たに施設整備をすることは、非常の厳しいので、漬物の製造許可を条例から外して欲しい。

基本方向2 皆が暮らしたい農村

(1) 農村コミュニティの維持・構築

65	佐久	小諸市は、農業体験のPRにJTBへ売り込みにいき、私立中学から140名訪れた。また、プリンスホテルと連携して、農業体験を受け入れている。都市農村交流により、農村の魅力を発信することは有効
66	佐久	農業体験は、都会に皆さんには魅力的なメニュー。これを通じて農村の理解者を増やすことは重要
67	上小	農村コミュニティの問題だが、地区内の中山間直接支払を受けているある集落では、後継者が皆無で現行対策が終了するまでが精一杯、それ以上の継続は無理、とっている。山に戻さざるをえないのではないか。
68	上小	農産物直売所は売上げ100～150万円という人が多く、定年後に年金プラスアルファとして行うこうした農業も、楽しい夢ではないか。中にはうつ病が直ったという人もいる。これらの農家も地域で大切な役割を担っており、切り捨てることなく大切にしていくことも農村の維持には必要だ。
69	上小	都市近郊では住民の苦情等もあり、大規模経営は不可能であるが、これらの農地の維持も重要だ。必ずしも全てのところで儲かる農業ができるわけではない。やりがい、いきがいとしての農業も方向性として重要。健康維持にも効果があり、生涯現役でできる。小規模農家を元気づける施策も必要。
70	諏訪	農業も雇用の場として地域の活性化に貢献すべき
71	諏訪	農業における女性の役割・地位の向上を更に図るべき
72	下伊那	農村コミュニティの維持・構築の項目が加わったことは良いことである。人口減少のなかで農村がどのようにコミュニティを維持していくのは大きな課題だと思う。県としてどのようなことができるか、具体的な施策を盛込んでほしい。
73	松本	長野県全体が中山間地域であるという考え方もできるが、その中でも特に条件の悪い中山間地域（限界集落的な地域）に対する支援を明確にしていく必要があるのではないか。
74	松本	中山間地域の中では5年先がどうなっているかわからないところがある。このような中山間地域への対策を明記すべきである。
75	松本	農業者だけではなく、地域住民、消費者を含めた全体で中山間地域を守っていくという施策をはっきりと打ち出すべきである。

76	北安曇	特に中山間地域では、子供も少人数になる中、人づくりが地域の活性化・地域づくりにつながる
77	長野	計画は非常にきめ細かく充実した内容であるが、県とか国は大きい農家を残したいのか、小さい農家はもういないのか。小さい農家に対しても、気配りややさしい目線を忘れないでほしい。
78	北信	観光は、有名観光地を巡ったり、温泉地を巡ったりから実際の生活をしている場を見たり実際に農業をやっている場を見たいという風になってきている。田んぼの畔道を広くして、稲穂の垂れている間を散歩できるような遊歩道やトマトやナスがなっているところを歩く遊歩道の整備も必要。
79	北信	都会の子供は、きのこが生えているところを見たり、農産物を収穫したり、田園風景の中で遊ぶ事が大好き、また、食べ物でも、そこでしか食べられない物の方が喜ぶ。田舎を全面に出すことが大切。
(2) 地産地消と食に対する理解・活動の促進		
80	佐久	直売所は安いイメージが定着してしまい、適正な価格で売りにくくなっている。
81	諏訪	農作業体験を受け入れ、消費者や観光客との交流の場を増やす
82	諏訪	子供だけでなく親世代の食育、食に対する理解増進も必要
83	諏訪	学校教育の場で食育にもっと力を入れる
84	諏訪	地産地消で地域の消費者にもっと地元農産物を供給し食べてもらう
85	上伊那	豊かな人間性を育む健康な食生活の普及を図るため「食育」に取り組んでいるが、「食育」と同じように、花をもっと身近に感じ、花について知っていただくために「花育」にも取り組んでいただきたい。
86	松本	農村の活性化や直売所の運営、農産物加工などにおいて女性農業者の役割が大きいので、さらにその活動への支援を明記する必要があるのではないか
87	松本	地産地消を進めることによって農家所得が向上するような対策が必要である。
88	松本	地産地消を進めるため、高齢者等が購入しやすいように、小さくてもよいので身近な場所に直売所や市場、小売店の設置を支援する施策が必要ではないか。
89	松本	食育の推進については、食育コーディネーター、食育リーダーの構築といった内容を含んでいると理解しているが、そうであれば良いのではないか。
90	松本	食の格差（低所得の家庭は安い輸入農産物を購入、高所得者ブランド品を購入）が少しずつ出てきており心配している。行政には食の公平という観点から誰もが一定の価格で購入できる態勢が必要ではないか。また、一方では特定の農業者しか生産できない農産物（高付加価値な農産物）については農業者個々取組みをいただくというような態勢がとれないか。
91	松本	地産地消の推進にあたっては、消費者の理解を深める対策が必要である。
92	松本	消費者側では、100g当たりの単価のみで購入を決定するといったような消費行動がとられており、例えば、生産者がふんわりとしたおいしい8分結球レタスを出荷しているのみ店頭では重さのみで購入しているというようなことがある。流通・販売関係者、消費者がもっと食について理解を深めていく必要がある。
93	松本	学校給食において、もっと地元農産物を供給しやすいシステムにしていく必要がある。

94	北安曇	農家民宿による観光農業との連携、農村交流の場づくりを通じた農村の活力の創出。
95	北信	食の問題や農村の良さは、2年や3年で伝えることは難しく、徐々に伝えていくことが大事。
96	北信	文科省の所管の教育課程の中にも食の大切さや農村の良さについて、積極的に関わっていくべき
(3) 美しい農村の維持・活用		
97	上小	労働力と機械装備がなければ、耕作放棄地はいつまでも解消しない。
98	上小	農地が虫食い状に転用されたり、荒れたりしている現状を憂慮している。地域をあげて土地利用を明確化したい。指導者が存在し地域ぐるみで体制を整えれば集団的に農地を守ることも可能。
99	上伊那	県政ビジョンの中で、きちんとした農業水利施設、又は農業基盤施設等の計画的更新・整備を考えていただきたい。
100	上伊那	捕獲した鳥獣の処理は埋め立てしている状況にあるが、広域的な取り組みで焼却できるような施設の設置を検討していただきたい。
101	上伊那	鳥獣被害対策を進めるためには、防護柵・電気柵などの設置が必要であるが、ニホンジカなどの頭数を削減することが重要である。
102	木曾	エネルギーの地産地消は必要であり、集落組織が管理運営していくことが望ましい。
103	松本	長野県全体が中山間地域であるという考え方もできるが、その中でも特に条件の悪い中山間地域（限界集落的な地域）に対する支援を明確にしていく必要があるのではないか。
104	松本	中山間地域の中では5年先がどうなっているかわからないところがある。このような中山間地域への対策を明記すべきではないか。
その他		
105	佐久	佐久地域を、長野県を守っていくためには、骨子の方向でよいと思う。
106	上伊那	生産額は重要な指標であり、この生産額を農業者に示すことにより来年の計画を作成して、誘導していくことが必要である。
107	上伊那	T P Pに参加することになれば、日本は壊滅的状況になると言われているが、もし参加した場合はどうなるかシミュレーションをする必要がある。
108	下伊那	農作業がしやすい環境整備(農作業への理解の醸成) 食の安心安全への関心は高まっているが、農作業への理解(騒音、農薬 散布等)が得られない現状がある。
109	下伊那	農業高校であっても加工実習をする施設が整備されていない。高校での農業教育をもっと充実してほしい。

110	下伊那	非農家でも定年後などに趣味的に農業に取り組みたい人が多いが、小面積でも借りられるような施策をお願いしたい。また、農作業機のレンタル等も検討してほしい。
111	木曾	対策の実施に当たっては経費がかかり、また町村の財政も厳しいため、県や国の支援をお願いしたい。
112	木曾	木曾のような条件では農地の集積や大規模経営は困難なことから、地域の状況を踏まえ営農の継続が可能な手法を検討していく必要がある。
113	松本	食・消費者を基盤・中心に据えていることは良いこと
114	松本	食育活動について記載があることは良いこと。いかに具体化していくことが課題である
115	松本	国の施策である青年就農給付金（150万円を給付）制度については、本当に独立できる就農者を育成できるか疑問である。それよりは、就農者の経営計画の目標達成のために必要な施設、機械等への補助の方が就農者がきちんと育つのではないか。
116	松本	T P P の状況によっては、見直しが必要になるのではないか
117	松本	県の振興計画の策定にあたっては、人・農地プランの策定が前提となるのではないか。集落のプランの積み上げが必要ではないか
118	長野	高齢者が農業へどういう形で参画をして地域農業の発展に結び付けていくか、盛り込んで欲しい。
119	長野	雇用により規模拡大している農家もあるが、単に農業振興というだけでなく雇用も支えているということなので、手厚い支援があってもよいと思う。
120	北信	計画の中で、計画達成をさせるための予算の裏付けについても明記すべき。